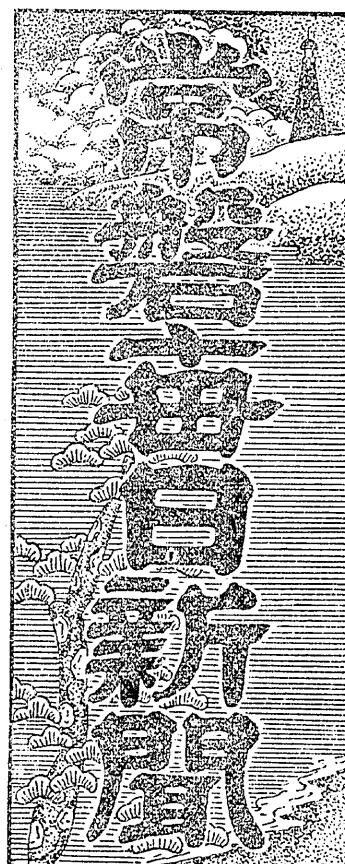


【刊夕】日三十二月十



清酒の出入

其に激減した

平税務署管内に於ける昨年十月から本年九月迄の清酒移出石数は郡山五十五石を筆頭に縣内一八四十三石、茨城一千百廿七石、青森二十七石、東京七百卅三石、新潟縣十一石、計二千百八石で、總計二千九百十四石に達し

縣外移出は茨城一千百廿七石、青森二十七石、東京七百卅三石、新潟縣十一石、計二千百八石で馬郡を最高に五百十三石、馬郡より茨城縣多賀郡を第一に五百十三石で移入總計一千六十四石であるが、是れを前年度に比較すると移出が約一割、移入は實に五割強の激減である。

と大獵を豫想し天狗鼻を動かして居たが、十五日の解禁以來一週間を経過して居るも未だ大獵の沙汰などは殆んど聞かれず、期待は完全に裏切られた有様である。依れば相當各方面共鳥獸の繁殖が良好を傳へられて居

子供の空氣銃は絶對使用出來ぬ

〔十一月十五日から來る十一月十五日から狩獵規則が改正される。この規則に依ると小鳥を射つ空氣銃の内で狩獵免状を受けねばならぬのはく然し狩獵免状は未青年者には下附出來ぬことになつたので子供は十一月十五日から絶對空氣銃の使用が出来なくなつたのである爲め協定を講すべく

荒井平署長の膽いりに依つて平湯本間及び平四倉間の乗合自動車の協定成り乗客の便宜は勿論交通緩和の成績頗る良好である事に鑑み上遠野村湯本町間の營業路線も競争激甚で營業者たる片寄朝男、鈴木子之吉の兩氏殆んど共倒れとなる状態

根岸より上遠野町に至る十錢根岸より澤渡に至る十五錢、同釜戸立場附近に至る廿錢、同田場坂に至る廿五錢、同藤原學校前に至る卅錢、湯本より同田場坂に至る廿五錢、同釜戸立場に至る廿五錢、同澤渡に至る卅錢、

江田信號所に於ける事は、即ち江田信號所に列車を停車せしむべき計画は半及び小川兩驛長の運動奏効し来る廿六日前七時廿五分半驛發列車を試みに停車せしめる事になつたが若し乗降客が少い時は今後停車しないと。

江田信號所にて正午から時間を開催、直ちに同氏が登壇し續いて木村、八田兩代議士最後に前東京市助役船田中氏の順序である。

明日の政友派

政談演説會

既報石城政友部會主催政談

演説會は明廿四日平町及び

植田町に開催される筈であ

るが、大口喜六氏が歸京を

急ぐ關係上、平町は聚樂館

にて正午から時間を勵行開

催、直ちに同氏が登壇し續

いて木村、八田兩代議士最

後に前東京市助役船田中氏

の順序である。

の順序である

愛讀者諸君に謹告!!

愛讀者諸君! 本紙は来る十一月一日を以つて、正に創刊滿七週年の紙齢を迎ふるに當り、茲に本社の一大飛躍計劃を謹んで膝下に御報告し得ます事は、是れ偏に各位日頃の御援助の賜と衷心より深く感激する處であります。

從來本社印刷工場は他人の所有に屬し、單に本社と連繫を保つ便宜上「常磐毎日印刷所」の名稱を冠したるに過ぎず、從て印刷仕上げ時間の遲延等に依る愛讀者諸君への御迷惑其他顧れば隔靴搔^コの感甚だしき爲め、機運一度至らば、本社直系の印刷工場を實現せしむべき意圖が、不斷熾烈なる願望となつて燃え盛つて居たのであります。

然るに、今や本社の地盤開拓漸く成り、四圍の事情悉く好轉するの機に臨んで、正に時期到来の感を強むるもの渺からざるに鑑み、急據同志と相圖り「常磐毎日印刷株式會社」を組織する計劃の基に、繁忙裡に諸般の準備を了し、去。

る十月六日創立總會を開き不肖私社長に推薦されて就任、十六日設立の登記を完了、翌十七日上京して、印刷機械器具、新活字及び附屬品一切を購入、茲に設備萬端を整ひ、眞に理想的なる地方紙としての本紙が、各位に相見ゆるの日近きを期するに至つたのであります。

斯る次第に就き、新工場の設備竣工の日迄、本紙は此の二頁体裁の小型新聞を一葉活版所主の義俠的應諾に依り發行する事になりました。而し夫れも僅に數日間の事で御座いますから新工場の出現と共に、如何に本紙が強く正しき地歩を確保し飛躍に次ぐに活躍を以つてするかを御期待の上、暫らく此の体裁を御辛抱の程伏して懇願する次第であります。

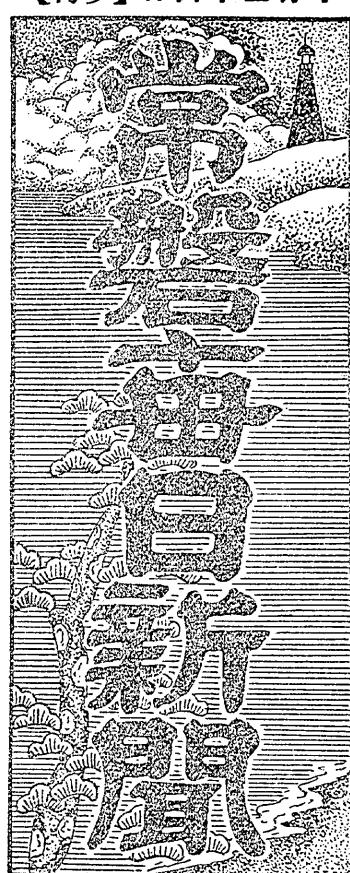
先づは本紙飛躍の新計劃を發表すると共に、多年の御厚志を此際深謝し、併せて各位の御健康を祈念します。

昭和五年十月廿三日

常磐毎日新聞社
社長川崎文治

日五廿月十年五和昭

【刊夕】日四十二月十



厘五錢郵錢十五月一錢貳金部一號五十行一詰字三十號五料告廣日翌ノ日祝祭大・曜日日刊休治文崎川人刷印人載編兼行發五三町橋長町平郡城石縣島福番○三六話電社開新日每號常所行發

借金政策の平町

財政建直し

いな行はずんば
悔を千載に殘す

平町では四年度分の水道町債償還金三万圓を年度内に償還する能はず、戸數割五年度前期分四萬餘圓を徴收し漸くこの程返還した許りであるが町債は近く著手の運びとなつてゐる道擴張工事により新に甘萬圓を起債したので町債總額は六十六萬餘圓の巨額に達し、全町民一戸當りの負債は實に百四五十圓となり、容易ならぬ重荷となつてゐる譯であるが町の稅收入は年額十六萬四千圓に過ぎぬところ、本年は不況の打撃を受け縣稅營業稅や雜種稅等において約一割一萬圓内外の減收を免れぬ模様であるに拘ず町債の償還金は小學校新築等に依る一般會計の分三萬九千五百八十六圓水道部四

平町では四年度分の水道町債償還金三万圓を年度内に償還する能はず、戸數割五年度前期分四萬餘圓を徴收し漸くこの程返還した許りであるが町債は近く著手の運びとなつてゐる道擴張工事により新に甘萬圓を起債したので町債總額は六十六萬餘圓の巨額に達し、全町民一戸當りの負債は實に百四五十圓となつてゐる譯であるが町の稅收入は年額十六萬四千圓に過ぎぬところ、本年は不況の打撃を受け縣稅營業稅や雜種稅等において約一割一萬圓内外の減收を免れぬ模様であるに拘ず町債の償還金は小學校新築等に依る一般會計の分三萬九千五百八十六圓水道部四

平町では四年度分の水道町債償還金三万圓を年度内に償還する能はず、戸數割五年度前期分四萬餘圓を徴收し漸くこの程返還した許りであるが町債は近く著手の運びとなつてゐる道擴張工事により新に甘萬圓を起債したので町債總額は六十六萬餘圓の巨額に達し、全町民一戸當りの負債は實に百四五十圓となつてゐる譯であるが町の稅收入は年額十六萬四千圓に過ぎぬところ、本年は不況の打撃を受け縣稅營業稅や雜種稅等において約一割一萬圓内外の減收を免れぬ模様であるに拘ず町債の償還金は小學校新築等に依る一般會計の分三萬九千五百八十六圓水道部四

平町では四年度分の水道町債償還金三万圓を年度内に償還する能はず、戸數割五年度前期分四萬餘圓を徴收し漸くこの程返還した許りであるが町債は近く著手の運びとなつてゐる道擴張工事により新に甘萬圓を起債したので町債總額は六十六萬餘圓の巨額に達し、全町民一戸當りの負債は實に百四五十圓となつてゐる譯であるが町の稅收入は年額十六萬四千圓に過ぎぬところ、本年は不況の打撃を受け縣稅營業稅や雜種稅等において約一割一萬圓内外の減收を免れぬ模様であるに拘ず町債の償還金は小學校新築等に依る一般會計の分三萬九千五百八十六圓水道部四

見たのは平町料理屋組合の一割五分減一萬三百廿圓だけ他は容易に纏りさうもなく、稅務係員が連日出張手を焼いてゐる。平警察署にては窃盜や詐欺が被害者の不注意に依る場合が多い爲め、是れが防止の注意心を涵起すべく水試験場長をして目下詳細に調査せしめて居る。

鮫川電力の水利權の許可に際しても魚類の繁殖保護に就いての條件を附すべく水試験場長をして目下詳細に調査せしめて居る。

平署が犯罪防止宣傳を行ふ由。中旬頃を期して犯罪防止宣傳を行ふ由。

見たのは平町料理屋組合の一割五分減一萬三百廿圓だけ他は容易に纏りさうもなく、稅務係員が連日出張手を焼いてゐる。平警察署にては窃盜や詐欺が被害者の不注意に依る場合が多い爲め、是れが防止の注意心を涵起すべく水試験場長をして目下詳細に調査せしめて居る。

見たのは平町料理屋組合の一割五分減一萬三百廿圓だけ他は容易に纏りさうもなく、稅務係員が連日出張手を焼いてゐる。平警察署にては窃盜や詐欺が被害者の不注意に依る場合が多い爲め、是れが防止の注意心を涵起すべく水試験場長をして目下詳細に調査せしめて居る。

見たのは平町料理屋組合の一割五分減一萬三百廿圓だけ他は容易に纏りさうもなく、稅務係員が連日出張手を焼いてゐる。平警察署にては窃盜や詐欺が被害者の不注意に依る場合が多い爲め、是れが防止の注意心を涵起すべく水試験場長をして目下詳細に調査せしめて居る。

祝儀の席に暴れ込み主人は激昂の極頗死

其筋の耳に入り捜査

情夫にみつぐ
金品を盗み

て鯛を漁獲の目的で港はこれに依つて一景氣出る由。

譯になるが、品物を被害者に返せよいか?」兩者「ウヘーツ」と平伏

祝儀の席に暴れ込み主人は激昂の極頗死

其筋の耳に入り捜査

情夫にみつぐ
金品を盗み

て鯛を漁獲の目的で港はこれに依つて一景氣出る由。

譯になるが、品物を被害者に返せよいか?」兩者「ウヘーツ」と平

愛讀者諸君に喜び!!

愛讀者諸君！ 本紙は来る十一月一日を以つて、正に創刊滿七週年の紙齢を迎ふるに當り、茲に本社の一大飛躍計劃を謹んで膝下に御報告し得ます事は、是れ偏に各位日頃の御援助の賜と衷心より深く感激する處であります。

從來本社印刷工場は他人の所有に屬し、單に本社と連繫を保つ便宜上『常磐毎日印刷所』の名稱を冠したるに過ぎず、從て印刷仕上げ時間の遲延等に依る愛讀者諸君への御迷惑其他顧れば隔靴搔^クの感甚だしき爲め、機運一度至らば、本社直系の印刷工場を實現せしむべき意圖が、不斷熾烈なる願望となつて燃え盛つて居たのであります。

然るに、今や本社の地盤開拓漸く成り、四圍の事情悉く好轉するの機に臨んで、正に時期到来の感を強むるもの渺からざるに鑑み、急據同志と相圖り『常磐毎日印刷株式會社』を組織する計画の基に、繁忙裡に諸般の準備を了し、去。

る十月六日創立總會を開き不肖私社長に推薦されて就任、十六日設立の登記を完了、翌十七日上京して、印刷機械器具、新活字及び附屬品一切を購入、茲に設備萬端を整ひ、眞に理想的なる地方紙としての本紙が、各位に相見ゆるの日近きを期するに至つたのであります。

斯る次第に就き、新工場の設備竣工の日迄、本紙は此の二頁体裁の小型新聞を二葉活版所主の義俠的應諾に依り發行する事になりました。而し夫れも僅に數日間の事で御座いますから新工場の出現と共に、如何に本紙が強く正しき地歩を確保し飛躍に次ぐに活躍を以つてするかを御期待の上、暫らく此の体裁を御辛抱の程伏して懇願する次第であります。

先づは本紙飛躍の新計劃を發表すると共に、多年の御厚志を此際深謝し、併せて各位の御健康を祈念します。

昭和五年十月廿三日

常磐毎日新聞社
社長 川崎文治